
L u c k y C a l l

貂寡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L u c k y C a l l

【Nコード】

N 7 8 0 4 R

【作者名】

貂寡

【あらすじ】

桜はある事件をきっかけに父親を亡くし、別居してた母とともにすごしていた。ある日海に出会う。そこから始まる物語。

第一話・出会い

『桜が舞う季節、俺は君と出会いました。』

俺は何もすることが無く、無職になったあの頃以来、ずっとこの道をひたすら歩き続けていた。桜が色鮮やかに咲き乱れているのは、興味もないし、花も嫌いだ。

「何でお前なんかがここにいるんだ！早く出て行っちまえばいいのに！」

勝手口から投げ出された鞆を追いかけようにして、細身のセーラー服を着た女の子が俺の前でうずくまっていた。

「大丈夫かい？」

目の前の痣だらけの桜うぐくすに聞く、桜は赤くはれた目をこすって、きょとんと俺を見上げた。勝手口はボタンと閉じられ、春の朝の静けさだけが漂っていた。

俺はできるだけ、笑顔を桜に見せた。笑顔は慣れなかったが少しでも嫌われなくなかった。しかし桜は笑わなかった。ただ頭を少し下げて、学校への道を歩いて行った。桜の母親。夕子ゆいこが気に食わない顔で窓の向こうから俺を見ていた。振り返るとただ桜の花びらが舞っていた、そういえばあの頃も舞っていたな。俺は今来た道を帰っていた。

窓の外に居た海かいの姿が見えなくなり、私はやっと腰を下ろした。

『何であの子がここににいるの？あれ以来姿を見せないから、てっきりどこか他の町へ行ってしまったと思ったのに。電話には出ないし本当に居なくなってしまったと思ったのに。桜は桜で気に食わないけど、海は海で気に食わない。』私は、部屋に散らかった書類を束ねながら、いらいらした。もうあの子なんていらぬ。もともと、

夫であるあいつが死んだのがいけないんだ。何で私がわざわざ桜の面倒を見ないといけないのよ……。さよなら……。桜。私は部屋を出た。

「桜おはよー」いつもと変わらない友達。手足にできた痣は少し長めのスカートと春先の長袖で隠れてくれた。「おはよう明あかりー」作り笑顔はいつの間にか上手くなった。だけど今日は笑えなかった。ただ毎日を送る日々、けど少しずつ変化する今、私はその中を漂っている。今朝会ったあの男の人は誰だったんだろう。何で私に笑顔で接してくれたんだろう……。？同情？私は授業を聞きながらふと思った。あの人は誰？

『桜が散る季節、私は貴方に会いました。』

第一話・出会い・（後書き）

お読みいただいた方感謝です。

第一話始まりましたが、まだまだ続きます。
良かったら続きもお読みください。

第二話・過去・

『私は忘れられない、父の笑顔。』

学校から帰ると家の中は真っ暗だった。温もりの無い無造作に積まれた書類の上に、小さなメモが置いてあった。

『今日から一人で暮らさない。私はどこかへ行くから、もう子供じゃないんだからね。机の上に二万円置いてあるから足りなくなったら、アルバムのお金使えば？あいつの遺品だから。夕子』

お世辞にも綺麗とはいえない母の字を私は千切り捨てた。もうこの家には誰もいないんだ……。私は父のアルバムを引つ張り出した。

父はアルバムに新札をコレクションするのが好きだった。小学生になってからは、私もお年玉を貰うたびにアルバムに挟んでいた。父のアルバムには、小さな頃の私がたくさん写っているが、母の写真は一つもない。母は私を産んでから父と別居をし、あの日も父のために涙を流すことは無かった。そう……。あの日……

父は笑って私を学校へ送ってくれた。その時が父を見た最後になった。昼休み、いきなり先生が蒼白な顔をして私を呼んだかと思うと、いきなり病院へと車を向かわせた。その車内で私は父が事故に巻き込まれたことを知った。それは、父の働いてた工場で、作業ミスにより火災が発生し、助けにいった父が大やけどを負ったということだった。病院に着くと、母がイスに座って天を見ていた。私は母が苦手だった。タバコ臭い息をかけられるのが嫌だった。父を置いてどこかへ行ってしまったのも嫌だった。母を横目に病室へ入ると、白い布を顔に掛けられている人がベットのの上にいた。

「^{まさし}政志なら死んだわよ」

母が軽く言った。そして帰ると手を引かれ、暗い家へと帰ったが母は何も言わずに、寝てしまった。私は何があつたのか分からずに父が死んだ、ただその言葉が繰り返し繰り返し頭を通過した。

「あつ」私は何度も繰り返しアルバムを見ていた。「この人・・・ある人の顔に目が止まった。それは、海という名前の人で、今朝大丈夫と声を掛けてくれた人だった。「父の同僚だったんだ・・・」私は、声を掛けてくれたことが嬉しかった。母がいない今、私はこの発見に少しだけ光を見出した。

『俺は忘れられない、あの過去を。』

第二話・過去・（後書き）

お読みくださったかたありがとうございます。

二話目です。

何か幼稚な文章ですみません

頑張って書いてますが

なかなか美味く表現できないふしがあります・・・

まだまだ続きますがぜひぜひ続きも読んでいただくと感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7804r/>

L u c k y C a l l

2011年10月4日15時06分発行